

戦後昭和における冒険旅行を考える

——遠心性の誘惑にとらわれた若者たち——

長 野 太 郎

要約 本稿は、占領終了から昭和末年までの戦後昭和期（1952-1989）に、日本語で公刊された旅行記、旅を主題とするエッセイ、評論などを対象として、冒険旅行をめぐる言説の傾向を検討する。右肩あがりやで経済成長をとげる一方、冷戦構造による世界の明確な分断が続いていたこの時期、海外旅行は今ほど身近なものではなく、海外に旅することそのものが冒険的なことのみであった。この時期の冒険旅行をめぐる言説は、さまざまな断層のなかに散在している。まずは、戦前からの国家主義を内包した探検のエートスが、京大野外研究派を通じて探検部に引き継がれ、1960年代中頃までつづいた。そこでは学術的新発見や、未踏地制覇のような記録が重視された。1964年に海外旅行が自由化されると、一部のエリート学生以外も探検的領域に足を踏み入れることが可能となり、前者の探検とはことなるスポーツ的行為、または冒険旅行が試みられるようになった。やがて、1960年代末の学園闘争をへて、探検のエートスは決定的に存立基盤を崩される。いよいよ多くの若者が海外に出かけ、長期の私的冒険旅行、いわゆる放浪の旅をおこなうと同時に、探検部もスポーツ的冒険路線に方向転換を余儀なくされた。戦後昭和において、海外旅行の大衆化、個人化が進行していくなかで、冒険旅行をめぐる言説は、私的物語となるか、スペクタクル化する方向をたどるか、いずれかであった。

キーワード：探検、海外旅行、旅行記

Sobre el viaje de aventuras en la posguerra Showa: deseo irrefrenable por lo centrífugo

NAGANO Taro

Abstract Este artículo pretende analizar la tendencia del discurso sobre el viaje de aventuras, prestando atención a relatos, ensayos o críticas de viaje publicados en japonés desde el fin de la ocupación norteamericana hasta el fin de la era Showa (1952-1989). En este período, la sociedad japonesa sigue creciendo mientras el mundo permanece dividido por la guerra fría. Por lo tanto el viaje al extranjero no es algo común y, a veces, el viaje mismo parece aventurado. El discurso sobre el viaje de aventuras se encuentra disperso entre distintas formaciones. Primero, el

club de expedición nace en el seno de la escuela de trabajo de campo de la Universidad de Kioto, que hereda una orientación nacionalista de la preguerra, buscando abrir fronteras científicas y conquistar lugares inexplorados. A partir del año 1964, el viaje al extranjero se liberaliza y, por tanto, todos empiezan a probar suerte en el extranjero practicando alpinismo, buceo o travesía por el río, o viajando a lugares recónditos del mundo. Tras el movimiento estudiantil de finales de los años 1960, la pauta de exploración desaparece definitivamente, y ahora la juventud sale a buscar un tipo de viaje errante que dura años, mientras el club de exploración se reorienta hacia deportes en la naturaleza. Finalmente, la masificación y la individualización del viaje al extranjero conducen al viajero hacia una orientación íntima o espectacular.

Palabras clave: exploración, viaje al extranjero, relatos de viaje

問題の所在—「冒険旅行」をめぐる言説の見取り図

本稿で明らかにしていきたいのは、戦後昭和期に出版された旅行記¹⁾にあらわれた、冒険旅行をめぐる言説の傾向である。言い換えるならば、戦後昭和期において、日本人旅行者にとって何が「冒険的」とみなされたのか、その「冒険」とはどうあらねばならないものなのか、そして、何が彼らをつきうごしたのか、についてである。直接的な分析対象は、占領終了から昭和末年までのあいだ(1952-1989)に、日本語で公刊された旅行記、旅を主題とするエッセイ、評論などである。旅行先はとくに限定しないが、おもに日本国外への旅行に焦点を当てたい。ただし、旅行記という形式の洗練や、個々の作品の審美的価値だけをとりだして問題にするつもりはない。むしろ、それらに書かれた冒険旅行をめぐる言説に見出される断層や、対立、無理解の様相を拾い上げていきたい。とくに、冒険旅行が個人化していくプロセスが、そうした亀裂を読み解くひとつの鍵となるというのが、当面の仮説である。

ひとを旅にかきたてる原初的な衝動としては、ドイツ語でフェルンヴェー(Fernweh)と呼ばれる、見知らぬ場所を訪れたいという説明しがたい感情をあらわす言葉が、日本でも古くから人口に膾炙してきた。fernは「遠い」という意味であり、wehは病いである。つまり、ホームシックと反対に、知らない場所にどうしようもなく恋い焦がれる、やむにやまれぬ思いをあらわす。これは、ジャック・ケルアックの小説『オン・ザ・ロード』について、訳者青山南が「遠心性の誘惑」と呼んだものと重なり合うだろう²⁾。

あらゆる旅行記には、多かれ少なかれ、遠心性の魅力が込められている。沢木耕太郎が著した自らの旅をめぐるノンフィクション作品『深夜特急』³⁾など

が、その典型と言える。このほか、小田実の留学記・貧乏旅行記『何でも見てやろう』、開高健の釣り紀行『オーパ!』なども、日常から離れ、遠くを旅する遠心性の誘惑を描いた作品としてとらえることができる。

多くの旅行記には、旅の歴史性と個別性ゆえに、短い消費のサイクルから脱落し、忘れられていく運命が待っている。上記三作品の場合、沢木は「路線バスの旅」、小田は「寄り道」、開高は「スポーツフィッシング」という仕掛けが存在することによって、歴史化や個別化を免れた。こうした作品を「旅行文学」と呼び、区別して考えることも可能だろう。しかし、本稿では、消費されるその他の旅行記にも目配りをしながら見ていくことにしたい。なぜならば、研究の目的は「私の旅」の歴史性に立ち返ることにあるからだ。その意味においては、消費され、忘却されていく数多くの旅行記もまた、さまざまな手がかりを提供してくれるはずである。

そもそも、旅行記はなぜ出版されるのだろうか？ ごく私的な自費記念出版をのぞいて、次のいずれかだろう。著者が有名人、または旅行をするのが当たりまえと思われる場合（職業的旅行者と読み替えてもいい）。旅のスタイルや内容が時代を先取りしている場合。旅行先の記述内容が新奇なものであり、後続の旅行者の手引きとなりうる場合。ごくまれにだが、旅行を記述する文章スタイルそのものに読むに値する価値が認められる場合（文学的価値と言い換えられるが、文筆家、作家の書いたもののすべてがこれに相当するわけでもない⁴⁾。

本稿の対象とする戦後昭和期において、海外旅行は今ほど身近なものではなかった。そのため、場合によっては、海外に旅することそのものが冒険的なところみであった。戦後昭和期の37年間をひとまとまりとしてとらえる理由は、この時期の日本社会が戦後の荒廃から出発して、右肩あがりで経済成長をとげていったこと、その一方で、国際的環境としては冷戦構造による世界の明確な分断が続いていた時期であることに求められる。

さらに、これを旅の諸条件から3つの時期に区分すると、①特権的旅行者の時代（1952-1964）、②冒険的旅行者の時代（1964-1977）、③大衆的旅行者の時代（1977-1989）ということになる⁵⁾。①の時期において、個人による冒険旅行は事実上不可能であり、探検隊や登山隊の一員として集団でおこなうしかなかった。②の時期になって個人による冒険旅行が可能となり、いまだ困難な旅行環境のなか、長期化・先鋭化する傾向があった。本稿は主としてこの時期の意義を浮き彫りにすることを目標とする。③の時期になると、誰でも比較的容易に海外旅行が可能となるいっぽうで、冒険旅行はスペクタクル化⁶⁾するか、私的になるかのどちらかであった。

以下では、上記の時期区分を念頭におきながら、冒険旅行をめぐる言説のあ

りようを見ていく。「探検」「冒険」「放浪」といった用語が、それぞれの書き手のなかで、ことなった重要性を帯びながら浮上してくることになるだろう。

ここで、本稿でもちいる用語のいちおうの定義をしておきたい。「探検」とは、主として集団で遂行される、未知の場所における野外調査活動である。「冒険」は、一定のルールにのっとって、集団、または個人がおこなう、具体的目標への挑戦である。「放浪」は、具体的目標を定めずに個人がおこなう、私的な探求の旅である。

これらは、相互に重なり合う部分をもちつつ、重点のことなる連続的階梯をなし、それらすべてをひっくるめていう場合には、「冒険旅行」という言葉をもちいる。

京大学派と探検

戦前戦後の時期にかけて、今西錦司を指導者とする京都大学野外研究派、すなわち、いわゆる「京学派」内の一分派において、学術研究の一過程としての「探検 (expedition)」の価値が強調された。当時、人類学的調査を含めた「地理的空白地帯」は、中央アジアと南米ぐらいにしかなく、今西らは、中央アジアのヒマラヤ、ヒンズークシ山脈に焦点を定めて調査隊を組織した。ここにおいて重要なことは、ただ単に人跡未踏の地に赴くことが目的とされたのではなく、動物学者、植物学者、地質学者、地理学者、民族学者など、異なる学問研究分野の専門家が集まり、共同で一つの計画を実現させていった、という事実である⁷⁾。

こうした今西グループから育った梅棹忠夫や川喜田二郎などは、戦後日本においてアカデミズムの枠内にとどまらないダイナミックな活動を展開し、それぞれの研究分野においても冒険や越境を繰り返した。梅棹は、国立民族学博物館初代館長として、日本の文化人類学研究推進の地ならしをしたし、川喜田は、KJ法と呼ばれる、組織におけるプロジェクト推進に役立つ発想法の分野で知られる。自らの著書『発想法』(中公新書)において、野外科学の重要性を強調した川喜田は、「探検」を、野外科学に限定されない学術研究の一段階として敷衍し、次のように述べている。

探しものがわかっていて、それだけを探しにゆくならば、情報の「探索」という言葉でよいのであった。ところが、そういう魂胆をあらかじめ決めてかかるとはいけななのが「探検」の段階である。

ここで探索という言葉を使わないで、探検という言葉を使うのは、そ

の意味からであった。「探検」という言葉はいままで学術的な言葉としては、扱われていないと思う。しかし野外科学的な発想法の道を歩くためには、私はこの際「探検」という言葉をもう一度、科学的な意味で、ここで使ってはどうかと思う。(川喜田、2017年、33頁)

この引用部分のなかで川喜田は、「探索」と「探検」を対比させて述べている。あらかじめ決められた情報を探しに行くのが探索であり、結果として知識を生成させるのが探検である。いずれもプロセスを指す言葉ではあるが、波及する範囲の広がりや要する時間の長さに違いがある。つまるところ、探検は、未知の領域との出会いを触媒として、新しい知識を創造的に生み出す方法論の一部分としてとらえられているのである⁸⁾。

こうした京都学派の薫陶を受け、京大農学部生時代に探検部を創設したのが、その後朝日新聞記者として華々しい活躍を展開した本多勝一であった。1956年に、大学生サークルとして日本初の探検部が京大に創設されたことはよく知られている。しかし、これは京大の野外研究の伝統から生まれた、いわば必然的な流れであり、本多個人の独創性や先見の明にその誕生理由を求めることは誤りである。

藍野(2011)が詳細に跡付けているように、戦前の京都には、京都一中山岳部、三高(第三高等学校)山岳部、京都帝国大学旅行部、AACK(Akademischer Alpen Club zu Kyoto 京都大学学士山岳会)と連なる、独自の山登りの伝統があった。今西錦司を核として形成された京都大学野外研究派の中心人物である梅棹忠夫(動物学)、川喜田二郎(地理学)、藤田和夫(地質学)、吉良竜夫(農学)らは、いずれも三高から京大に進学した面々であった。梅棹はのちに、三高山岳部が目指したのは「コンプリート・マウンテニアリング(完全なる登山)」だったと語っている(藍野、2011年、60頁)。つまり、ただ単に山頂を目指すのではなく、人や多様な自然環境全体をも含めた、山全体と触れ合う方向性である。こうした指向性が、今西のリーダーシップのもと、登山と学術調査を両輪とした野外調査、すなわち「探検」の実行に収斂していった。

京大探検部は、戦後になって誕生した京大山岳部内部の登山派と探検派の対立から生まれた。つまり、探検部は今西グループの探検に憧れる本多をリーダーとして、山岳部から分派する形で誕生したのである(藍野、251-264頁)。その意味で、本多は京大野外研究派の申し子であり、その後ジャーナリストになってからも、学術調査を志向する独特の冒険論を展開し、たとえば植村直己に代表されるような、「スポーツとしての冒険」や「冒険旅行」を批判したのであった。

本多勝一の冒険論と植村直己

本多勝一（1932-）は、1960年代から1980年代にかけて、朝日新聞のスター記者として活躍した。特に、朝日新聞入社後に発表した、『カナダ・エスキモー』、『ニューギニア高地人』、『アラビア遊牧民』といった辺境地におけるルポルタージュで、大いに世間の注目を集めた。新聞社所属のサラリーマンでありながら、行動派ジャーナリストとして、独自の地位を切り開いたのである。

前述したように、本多の原点は20代の京大探検部時代にある。京都大学とパンジャブ大学合同のパンジャブ・ヒマラヤ探検（朝日新聞社後援）に参加した本多は、1956年（昭和31年）11月14日、朝日新聞朝刊にその文章が名前入りで掲載された。彼は、特権的旅行者の時代に、大学探検部員という特別の立場を利用して海外遠征を経験した世代の一人である。

こうした彼が追いつけたテーマの一つが冒険論であった。本多は、みずからの冒険に関連する文章をまとめた書物『冒険と日本人』を、幾度かにわたって公刊している。朝日文庫版（1986年）には、1960年代半ばから1980年代半ばにかけて書かれた、様々な文章が収められている。30歳代初めから50歳代初めにかけて、朝日新聞記者としてのキャリア、立場が変わり、時代状況が変化するなかで、「日本人には冒険が必要だ」とする主張は一貫している。しかし同時に、冒険的行為のとらえ方、力点の置き所には時期によって少しずつ変化が見られる。

1967年に書かれた「『探検の大衆化時代』の意味」と題された文章⁹⁾には、自伝的な表白が見られる。

海外遠征に出たいという気持ちになった最初の動機は、個人によってまったくまちまちである。ある者には幼年時代の、山や森を歩いた思い出の延長であり、ある者には「できるだけ人間のいない、地の果て」へのロマンチズムであり、ある者には日常の退屈さからの脱出でもあろう。初めての海外遠征に、目的はともかく、原初的動機を明確に自覚している者はむしろ少ない。が、いったん実現されると、事態は変わってくる。「このエクスペディションは、自分にとって一体なにか」という自問を、どうしても強いられる。それまでの自分の世界よりも、はるかに広い世界を知ったことは、「禁断の木ノ実」を食べた場合のような効果を表す。（本多、1986年、89頁）

ここに語られるのは、「冒険」というよりも、自らの「探検」の原点への思い

であり、文章のタイトルが示すとおり、特権的行為であったかつての「探検」が大衆化し、特別なものではなくなった事態を、やや揶揄するように取り上げている。

それから4年後の文章「『探検』『冒険』『放浪』を促す社会的背景」¹⁰⁾になると、昨今は「探検」よりも、「冒険」、ないし「旅」が主流になってきたと説明する。

最近おもな大学にはほとんど設立された探検部の行動を検討してみると、二つの流れが確認される。ひとつは、海底探検やケイビング、川下りなどにみられるように、著しくスポーツ化している点である。京都のグループが北海道でやった気球など、その典型といえよう。探検というよりも、純粋な「核」としての冒険になりつつあり、事実「冒険クラブ」と言った名称も生まれている。

他方は、海外での「旅行」への傾斜である。団体観光旅行では味わえない「変わったコースの観光旅行」といった程度の、矮小化された探検が多くなった。(本多、1986年、115頁)

「矮小化された探検」といったいい方にみられるように、本多は「探検」を、「冒険」や「旅行」の上位におき、もっとも価値あるものとしてとらえている。

海外での冒険的旅行をこのよう理解する本多が、1980年前後に頻繁に言及したのが、植村直己の極地行の意義をめぐっての自らの見解であった。本多は、植村が行なっていることは、未踏査地域の制覇ではない意味で、「探検」と呼ぶことができず、「スポーツとしての冒険」、または「冒険旅行」に過ぎないと断言する。「探検」に最大の価値を置く本多にとって、植村の行動は「探検」に至らない「冒険旅行」にしか見えず、物足らなかつたようだ。しかも、植村が1978年にやり遂げた、犬橇を使った北極点到達に関しては、植村がスポンサーに主体性を奪われたピエロのような存在に近くなった、とまで言う(本多、1986年、311頁)。

そのいっぽうで、自分より9歳年下で、戦中生まれ世代の植村(1941年生まれ)に対して、「全く新しいタイプの山男」というように、一定の評価を下してもいる(本多、1986年、277頁)。ただし、以下の文章¹¹⁾に見られるように、本多にとって植村は、あくまで冒険的旅行者であって、登山家や探検家の範疇には入らない。

植村氏は、もともと「探検史」や「人類史」の最先端をきりひらこうと

というような意識で極地に挑戦したのではなかった。大学で山岳部にはいった動機から「自分には文化サークルにはいれる才能はなし、運動部となると、みんな高校の時からバリバリやった連中ばかり」なので、「ふと思いついて」「山岳部なるものをのぞいてみた」だけだ。(中略)

以後、モンブランを皮切りに五大大陸の最高峰を次々と登ってゆく過程は、対象が山だから登山には違いない。が、より本質的には「世界放浪」であり、冒険をともなった「旅」なのだ。その「旅行記」を読むと、登山行為そのものもさることながら、むしろそれ以外のところ—彼自身の痛快な行動や、行く先々で親しく接する人々の話が実におもしろく、かつ感動的である。

本質が世界冒険旅行であってみれば、対象が山から極地が変わっても何のふしぎもない。(本多、1986年、253-254頁)

今日、5大陸最高峰登頂や、北極やグリーンランドでの犬橿旅行などの実績で知られる植村だが、学生時代に海外遠征に参加し、名前入りで新聞に紹介されたような、特権的旅行者世代の本多とは違って、あくまで無名の存在から出発した。植村の最初の著作『青春を山に賭けて』(毎日新聞社、1971年。文春文庫、2008年)には、山岳部に所属した学生時代から、4年5ヶ月におよぶ海外滞在と登山にいたるまでの冒険旅行がつつられている。たしかに、本多の言うとおり、植村直己の出発点は、世界放浪にあった。植村は、海外に旅立った動機を次のように書いている。

「そうだ、ヨーロッパ・アルプスに行こう。そして、日本にはない氷河をこの目で見よう」

と私は決心した。資金のない私は、とうぜん現地でアルバイトをしてかせがなければならない。とはいったものの、フランス語もドイツ語も、イタリア語もできない。そんな私にヨーロッパでアルバイトの口があるだろうか。

そこで考えついたのは、生活水準の高いアメリカで高い賃金をかせぎ、パンとキュウリを食べて支出を減らせば、ヨーロッパ・アルプス山行の金がたまるのではないかということだった。(植村、2008年、18頁)

海外旅行自由化の直後、1964年に船で日本を出発した植村は¹²⁾、カリフォルニアやフランスで働き、節約をした末に、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南米、

北米での登山を行なった。なかでも、明治大学山岳部のヒマラヤ遠征に加わり、未踏峰ゴジュンバ・カン登頂に成功した出来事は、図らずも、植村を日本の山岳界で一定のネームバリューをもつ存在に押し上げた。しかし、出発点だけ見れば、彼は、60年代から70年代にかけて、長期にわたって世界を放浪した日本人旅行者と、きわめて近い位置にいたことがわかる。

数年ぶりで帰国した植村は、変化の激しい日本社会の日常に適應できない自分自身を自覚する。

都心には高速道路が縦横に走りまわり、めまぐるしい東京に、私はしばしばとまどいを感じた。5年近くのブランクのある私は、もう生存競争の激しい日本社会には、ついていけないような気がしてならなかった。旅から帰ってきて、すぐ仕事につく気にもなれず、私は再び南米にでも旅にでることを考えた。しかし、金などあろうはずもなかった。旅から帰ってから、その日の生活費にも追われる状態であった。(植村、2008年、226頁)

植村にとって、旅とはただ単なる放浪ではなく、自らが立てた目標への挑戦の過程であった。目標を達成することで、次の目標が生まれる。そのことについて、植村自身は次のように語っている。

過去の出来事に満足して、それに浸ることは現在の私にはできない。困難のすえにやりぬいたひとつ、ひとつは、確かに、ついきのうのできごとのように忘れることのできない思い出であり、私の生涯の糧である。しかし、いままでやってきたすべてを土台にして、さらに新しいことをやってみたいのだ。(植村、2008年、285頁)

植村にとっての冒険は、「調査」や「新記録」のような、公的観点から価値を認められる探検であるよりも、私的目標の達成の連鎖であった。そして、本多が見落としていたことの一つは、植村の「単独行」へのこだわりであり、それを実現させるまでにたどった準備のプロセスであった。無名時代からの植村直己をよく知る文芸評論家・エッセイストの湯川豊は、植村にとって、一人でやり遂げること、そして、先住民に学ぶことが、きわだったやり方であったと強調し、その冒険を擁護する。

植村の冒険には、利益も使命感もない。何も手に入れないという点では

最も抽象的な行動であり、言葉を換えていえば純粹である。「前人未到」という記録性への執着からいうと、植村自身がいうようにスポーツに似ているところもあるが、場所と時間を限定して競うのではないという点で決定的な違いがある。(湯川、2017年、283-284頁)

湯川が「純粹な冒険」と呼んだ植村の活動は、記録性への意識があるとはいえ、それ以前の探検世代に比べると、より私的な目標設定がベースにある。冒険動機の個人化ゆえに、上の世代から批判され、下の世代に強い印象を残したといえることができるだろう。

室謙二の旅行論と鈴木紀夫

1970年代に入ると、日本の若者の旅のあり方にまた新たな傾向が生まれてくる。必ずしも「探検」や「冒険」ととらわれない、「放浪」というスタイルである。1946年生まれの評論家室謙二は、29歳の時に評論集『旅行のしかた』（1975年、晶文社）を出版した。中身は、自らの旅の記録、およびそれをめぐる思索、さらには同時代の放浪旅行者批判といった、雑多な内容からなっている。

室は、自らの旅から帰って、どのように旅をすべきかについて思弁を巡らせる。だから、室の『旅行のしかた』の前半部は、旅行記のみずみずしさをとどめているが、後半部は、旅の証言ではなく、旅と、読書と、思弁を経て蓄積した思考の表明であり、前半部に比べて硬質だ。前者は遠心性の素直な表出であり、後者は旅の後に生じる求心性、あるいはカミングホームの所産である。

室は、旅とは、見聞した出来事の意味を考え、考えることを通じてまた旅するといった、反省的实践であるにとらえている。物事の意味について熟考せず、旅するために旅することはよくないと考える。1960年代の高度経済成長期を経て、日本人は海外旅行をできる側になった。しかし、世界には海外旅行をできない側の人々もいることを意識すべきだ、というのが室の主張である。

きわめて大雑把に分ければ世界は、この足の下に地を見ながら飛行機に乗って天をかけめぐることが出来る人びとと、その地から飛行機を見上げる人びとに分れる。(中略)

そして日本は今ではこの空飛ぶ人間の国になった。(たとえ国内には「飛ぶ人」と「地にいる人」の間に深いさげ目があっても対外的にあきらかにそうだ。)(室、1975年、14頁)

メキシコを旅行した際、室は、アメリカからやってくるヒッピーたちの「インチキさ」加減を目の当たりにする。経済力を背景に、物価の安いメキシコに来て、アメリカを否定した気になっている彼らは、メキシコに文化帝国主義を押し付けているだけだ、と考える。

程度の差こそあれ、アメリカから逃げ出したい彼らは、夢を求めてメキシコにやってくる。それは、インドとか、日本とか、中国よりもっと彼らにとって手近な、安直な夢だ。

アメリカをバカにしつつ、アメリカと手を切ったと思いつつ、実はアメリカを頭のなかにいっぱい詰めこんだ、アメリカの富のために生きられるアメリカ文化なのだ。(室、1975年、57頁)

室の眼差しは、同時代の日本における、長期海外放浪者にも向けられる。その槍玉にあげられたのが、小野田元少尉の発見者として脚光を浴び、その後、旅行記を出版した鈴木紀夫である。室は、目的もなく海外をわたりあるく鈴木が、訪れた国々について無知であり、考えようともしていないと糾弾する。

彼の文章を読むと、金をつかわないでどう旅行したか、どう苦勞して金を作ったか、どういうトラブルがあったか、いっしょに旅行する、また時々出会う同じような日本人青年の仲間たちのことは書いてあるが、彼が通過した国々で何を見、何を感じ、何を感じたかは、ほとんどない。時々あらわれる感想は子供っぽい、紋切り型の反応だ。それぞれの国の人々の生活とその風土は、彼の旅の中の主役ではない。主役は、お金なしでそれらの国々を移動する、というそれ自体だ。(室、1975年、141-142頁)

室が鈴木紀夫をめぐる批判したように、海外の長期旅行者のコミュニティをわたり歩く鈴木のような旅行者が、旅先の現実について無知であったことは間違いない。しかし、彼らはそうした現実とコミットすることをあえて拒んだのであって、ただ単に無知だったのとは違う。そこには、鈴木が日本脱出を思い立ったころの、若者たちの理想主義への傾斜と、その後の幻滅を読みとる必要がある。

鈴木は、旅先で見た夢にかこつけて、日本を脱出して来た当時の気分について次のように書いた。

七〇年を前にした学生紛争のころ、僕もゲバ棒をもってカリカリうわずっていた。理論もやりかけた。討論にも加わってみた。しかし完全に同調する気にはなれなかった。なぜかというに、理論をやったって—もともと苦手なんだが—だんだん理論が現実とあまりにもちぐはぐに感じられてきて、これはへんだと思いだしたのだ。

議論といっても、特定の者がわめいて、ぶっ叩いて、僕なんかには発言もさせない。それでいて言葉で引っぱっていかうとする。理論のための理論といえはまだ格好もつづくが、単なる言葉の遊びじゃないかと疑いだした。(中略)

それだから僕は外国へ出て来たんだ。いやになったから飛び出して来たのだ。(鈴木、1995年、38頁)

鈴木には日本の社会と、硬質な言葉に対する失望があった。鈴木の記事には、硬質な言葉や理論を拒絶しようとする、意図的な軽さのスタンスがある。室にはそうした部分が目にはいらなかったのだろう。室だけではなく、小野田元少尉発見を通じて一躍時の人となった鈴木に対する、同時代のマスメディアも同様である。1974年4月2日の朝日新聞「天声人語」には、鈴木に対する無理解を示す、次のような言葉が見られる。

こういういり卵をかきまぜたような「スクランブル人間」は、現代青年の一典型かも知れぬ。物にこだわらず、何にでも物分かりがよいから、自分の言うことがつぎつぎに矛盾しても、気にもしないし、気づきもしない。早春の芝焼きのように、芝草の表面をストリーキングのようにすばやく走る。

小野田さん救出の一連の騒動を通じて、マスメディアに「鈴木青年」と呼ばれた彼は、注目される存在となり、それゆえ、旅行記も出版された。あらかじめ世にでることが定められていた旅行記ではなかったのかも知れない。騒動自体について、彼は「二十四歳の人間にとって、今度の体験はあまりにも重荷になった」と記している。それでも、旅を続ける意志が前向きなエネルギーであり、「旅すること」について次のように述べている。

アポロが月に到着し、人類の輝かしい第一歩が踏まれたころ、僕は中

近東の砂漠を何も知らずただひたすら西へいそいでいた。アポロが無事、地球に帰還したニュースを初めて聞かされたのはヨーロッパであった。しかし、ヨーロッパの風景に初めて接して感激したほどの喜びはわかなかった。

アポロ計画は偉大なる人類の事業であろうが、僕にとっては苦しい旅を乗り越えて、目的に着いた僕自身の行為の方がより素晴らしく思えてならなかった。(鈴木、1995年、271頁)

アメリカ合衆国によるアポロ計画の実現は、「探検」が地球外にまでおよぶようになったという意味でも、画期的な出来事であった¹³⁾。しかし、鈴木は、それよりも自分自身の私的冒険旅行の方が意義深いことだった、と宣言しているのである。

鈴木もまた、遠心性の誘惑にとらわれて、地上を移動し続けたひとりである。鈴木は、脱出した当時の日本の現実に嫌気がさし、そうしたあり方と距離を取りたいがために世界を長期間にわたって放浪した。その意味で、鈴木の旅にフェルンヴェー（遠心性の誘惑の病い）の側面は比較的希薄だったかもしれない。いずれにしても、鈴木『大放浪』は、出口の見えない旅の継続、あるいはその気分の貴重な証言となっている。

探検部の変質と冒険の個人化—高野秀行『幻獣ムベンベを追い』

1960年代の大学探検部の活動と、1970年代のそれには、大きな断絶が見られる。海外旅行自由化以前の大学探検部には、大学教員が組織する探検隊の若手隊員として、学部生や大学院生が加わるという側面があった。学術調査、および未踏地の制覇双方において、彼らは補助的役割を果たしつつ、その過程で、調査の手法、登山や極地行の技術などに習熟していった。いってみれば、この時期の大学探検部は、探検隊予備軍であると同時に、人材育成の場でもあった。

しかし、さまざまな方向から、それは崩れていった。文部省による海外調査研究費が支給されるようになると、海外調査は教授が自らの指導する大学院生を率いておこなうようになり、学部生主体の探検部は、調査遂行のためには必要でなくなった。また1960年代末に盛り上がった全共闘運動の学園紛争が、既存の大学組織のあり方に疑問を投げかけるようになると、探検部における教員と学生の協力関係は、エスタブリッシュメント側による学生の「利用」ととらえられるようになった¹⁴⁾。

こうして、導き手としての教員との関係を失った探検部は、活動目標や方法

を独自に見出していかざるを得なくなった。そうして、山登り、川下り、洞窟探検、ダイビング等といった冒険的行為や、世界の辺境への旅行に収斂していったのだった¹⁵⁾。

その一方で、京大探検部に始まる探検部の系譜が、何も残さず、ただ形骸化したという訳でもない。日常的な訓練を積むとともに、事前に多くの資料を収集して計画を立て、遠征を実現し、その後に報告書を作成するというスタイルは、その後も探検部文化¹⁶⁾として引き継がれていく。そしてまた、すべての冒険が世間の目に触れることなく消えていったわけでもなかった。

そうした意味で興味深いのが、1988年に早稲田大学探検部が実施したコンゴ・ドラゴン・プロジェクト (CDP) の記録として、高野秀行が著した『幻獣ムベンベを追え』(2003年、集英社文庫)¹⁷⁾である。

高野がリーダーとして率いたCDPは、当時日本と国交がなかったコンゴ人民共和国(現在のコンゴ共和国)に、11名からなる遠征隊を送り込み、密林に囲まれたテレ湖において伝説の未確認生物ムベンベをめぐる実地調査を行うという、大掛かりな「探検」であった。高野らは、予備調査をおこなってコンゴ政府とコンタクトをとり、計画書を作成したうえで、企業からの寄付も獲得した。しかし、協賛金を得るにはいたらず、遠征の実施は参加メンバーの自費でまかなわれた。学生がアルバイトや借金で、ひとりあたり70万円という金額を工面しえたのも、バブル景気に沸く当時の日本社会の状況をあらわしている。

しかし、豊かになった日本の若者たちが、すみずみまで探検しつくされてしまった地球上で、どのような「探検」をおこないえたのであろうか。高野は、探検隊のこだわりについて次のように記している。

また、私が「1ヶ月24時間完全監視」を思いついたのもこのときである。スターライトスコープ(夜間暗視装置)を用意しているので、もちろん夜間の監視はするつもりだったが、日本にいるときはそこまで思い至らなかった。

『『完全』』というのは、1ヶ月間、1分たりとも湖から目を離さないことだ。2人1組8時間3交代でやろう。きっとこんな調査方法は世界初だろう」

私は気合が入ってきた。みんなも異論がない。こうして、普通人をあきれかえらせる作戦—流通業界を愛する向井が呼ぶに「セブン-イレブン方式」—が採択されたのである。(高野、2003年、53-54頁)

先行する調査隊がおこなっていない方法をとることによって「世界初」が実現されるというが、どことなく真剣味を欠いた発想である。彼らが意識するのは「普通人」であって、公的に価値の高い学術的成果の獲得や、人跡未踏地の制覇、といったような大げさなものではなかった。さらに、現地への滞在期間にも同様のこだわりがあった。

「テレ湖にどれくらい滞在したいのか」

ときかれ、私は迷わず、

「40日」

と答えた。これにはわけがある。今まで最も長くテレ湖に滞在したのは、アメリカのレガスターズ隊で32日。科学調査においてはかなわないにしても、滞在日数だけは他の探検隊に負けたくない、というわれわれのささやかな意地なのである。(高野、2003年、59頁)

このように、CDPにおける探検は、あくまで「これまで誰もやっていない」という意味での、ヴァリエーションを求めているに過ぎず、それすら、常人たちがあまり深刻にとらえていない様子がかがわれる。

しかし、肩肘を張らない自然体のスタンスであったにせよ、遠隔地の過酷な環境のなかで、予想外の困難がつつぎと彼らに襲いかかる。機材の故障、病気、現地人との摩擦、食料の欠乏、そしてムベンベ目撃情報の不確かさ、などである。しかし、もっとも困難な課題は、存在するかどうかわからないムベンベを、40日にわたって監視し続けること自体からくる徒労感であった。ムベンベ監視を始めてから2週間ほどたった時の気分を、高野はこう記す。

はっきり言って、なぜ自分がこんなことをしているのかわからない。わからないながらも、あまりに無意味な活動をしているので、なぜか快感すら覚える。「普通の人には、ちょっと真似ができないな」と思う。あたりまえだ。(高野、2003年、185頁)

探検に社会的意義など求めないという、多少強がりも含めた開き直りが感じられる。しかし、この5日後になると、虚無感はさらに深まる。

それにこのけだるい雰囲気は何だろう。見張りの二人以外はみなグターツとして何もしていない。昨日のトラブルや夜の会話が直接の原因というわけではないが、何とも言えない無力感が漂っていた。

私は自分たちの行っていることに急激な虚しさを感じた。このまま何も残らずに終わってしまうのだろうか。終わってしまっても日本で何が待っているのか。無関心と借金のお山だけだ。そして何よりもこんな気持ちで帰国後もずっと残ると思うとたまらなくなった。借金は返せても、虚しさは返せない。(高野、2003年、211頁)

追い討ちをかけるように、メンバーの不満も噴出し、リーダーの高野は、それまでの楽天的姿勢そのものへの反省も強いられる。

「みんな思ってるよ、これは高野さんに連れてきてもらったようなもんだし、高野さんの計画だって……でもね、……」

けっして彼は悪い意味で言ったのではなかったが、私の胸に突き刺さるようなものがあった。(高野、2003年、233頁)

このメンバーの発した言葉により高野が気付かされたように、多くのメンバーが参加した大規模な遠征ではあっても、事実上、高野個人の情熱が、他のメンバーを巻き込んで実現したものに過ぎなかった。たとえば、かつて京大野外研究派が実現したように、さまざまな専門知識を有する研究者がチームを組み、探検という名の千載一遇の機会から、それぞれが有意義な成果を引き出していったような時代とは、隔世の感があった。

高野が書き記したCDPの探検の記録は、1980年代末における学生サークルの活動を、リアルに再現するものとしてすぐれている。そして、高野の目を通して見た、等身大の現地の人々とのやりとりが、共感に満ちた筆致で綴られている。それゆえ、公刊されたこの文章の質の高さを評価されて、高野はフリーランスのライターとしての道を踏み出すことになる。じっさい、実質的なデビュー作である『幻獣ムベンベを追い』において、するどい観察眼、冷めた客観的なまなざし、わかりやすい言葉遣い、とぼけたユーモアなど、のちの高野の著述スタイルはほぼ完成している。

ただ、かりに抜き出した執筆能力をもってにせよ、部の活動の一環であり、集団行動であったはずの遠征行の記録が、高野一人によって書かれたということは、もはや冒険が個人化し、個人の視点からの物語、すなわち、「私ノンフィクション」¹⁸⁾の形でしか語り得なくなったことを示している。

これ以降、高野は主として辺境地をテーマとしたノンフィクション作家の道を歩み、自らの経験を読み物として読者に差し出す、スペクタクルとしての旅を続けながら、世界各地を放浪し続けることになる。

おわりに

ここまで見てきたように、戦後昭和の日本において、冒険旅行をめぐる言説はさまざまな断層のなかに散在している。

まずは戦前からの国家主義を内包した探検のエートスが、京大野外研究派を通じて探検部に引き継がれ、1960年代中頃までつづいた。そこでは学術的新発見や、未踏地制覇のような記録が重視された。1964年に海外旅行が自由化されると、一部のエリート学生以外も探検的領域に足を踏み入れることが可能となり、前者の探検とはことなるスポーツ的行為、または冒険旅行がみられるようになった。やがて、1960年代末の学園闘争をへて、探検のエートスは存立基盤をうしない、いよいよ多くの若者が海外に出かけ、長期の私的冒険旅行、すなわち放浪の旅をおこなうと同時に、探検部もスポーツ的冒険路線に方向転換を余儀なくされた。海外旅行が大衆化、個人化していくなかで、かつて集団での創造的行為として働いた探検は実質を欠いたものとなり、探検的行為のスペクタクルであるほかなくなった。

このように冒険旅行が個人化していく昭和の終わりから平成にかけて、頻繁にもちいられるようになったことばに「自分探し」がある。初期には「自己啓発セミナー」のような場において、自覚されざる自分自身との出会い、のような意味でもちいられた「自分探し」だったが、だんだんと目的を定めない旅などにもあてはめられるようになった。

あたかも、集団での宝探しのような様相のあった「探検」から、きわめて個人的な「放浪」の旅へと、焦点が移動していった戦後昭和の37年間の推移を、この「自分探し」の登場が象徴しているかのようである。「ここではないどこかへ行きたい」という、遠心性の誘惑の病いは、脈々と日本人のなかに存在してきた。しかし、その内実はひとつではなかったのだ。

本稿は、およそ一年半前に、これまでに自分自身が行ってきた旅の意味、とくに、21歳で一念発起して旅立った中南米における、約10ヶ月の旅の意味合いをふり返ろうと考えた始めたところに端を発する。しかし、自分史を語ろうというのではなく、むしろ、これまで個人的には自明なこととして片付けていた、1980年代末における比較的長期間におよぶ冒険的海外旅行の意味を、同時代的文脈に位置づけなおすことを意図した。

具体的には、自分がかつて読んだであろう旅行記を読みなおし、何から影響を受けたのかを検証するところから始めた。当面の目標としては、敗戦後の占領が終了してから昭和の終了までにいたる期間の、日本人による中南米紀行を

直接の題材とした。

なかでも、最初の旅に出発する5年ほど前、高校生だった私が感銘を受けた本として記憶に残るのが、『飲んで食って寝て』という無名の旅行者たちによる回想記である。この本は、1960年代末から1970年代前半にかけて、数年間にわたって世界を放浪した、冒険的旅行者たちの足跡を記録にとどめている。

当時、彼らのように日本を出て、数年間にわたって海外を渡り歩き、帰国後体験談を出版する若者が数多くあった。こうした「放浪」の旅において、比較的最後にたどり着く場所のひとつが中南米であり、大衆的旅行者の時代に入っても、あまり一般的でなかった旅先が中南米地域であった。つまり、第3の時代に中南米へ旅立った私が影響を受けたのは、第2の冒険的旅行者の時代の旅行記であった。

その自覚のもとに、それでは「冒険的旅行者」とは何であるかについて、本稿において考察をこころみた。その結果、京大野外研究派、探検部など、これまでとくに注意を払ってこなかった問題にたどりつくことになった。

たしかに、本多勝一が嘆息するように、日本社会において冒険という行為はあまり積極的にとらえられてこなかったのかもしれない。1960年安保闘争においても、「極左冒険主義」という言葉が、左派内部においてすら否定的な意味合いで用いられた。「冒険」は理性でおさえこむべき対象とされている。でも、だからこそ……と考えるのは、本多だけではないだろう。

今後の課題としては、女性と冒険の問題について明らかにすることが残っている。これは、女性が冒険をおこなうかどうかではなく、女性が人生において、自らを不安定や危険にさらしておこなう行動を「冒険」というようなことばでとらえるのか、あるいはそうではないのかを見きわめたいのである。

そして、今回部分的に言及した、京都学派の遺産についても考え続けていきたい。とくに、梅棹忠夫とともに国立民族学博物館創立に尽力しながらも、惜しくも早世した泉靖一の位置づけは気にかかる。今西にヒマラヤ遠征への参加を打診された彼がそれを断り、南米調査に赴いたことによって、その後の京大との関係において、東大にはどのような中南米研究が立ちあがったのだろうか。

また、日本人の冒険旅行をめぐる考察に関しても、少しずつ、戦前と平成以降の時期に考察の範囲を広げていきたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、事前に研究懇話会における口頭発表の機会を与えてくださった清泉女子大学人文科学研究所のみなさま、当日有益なコメント

を頂戴したみなさますべてに感謝申し上げます。とくに、九州大学探検部OBである、地球市民学科の大野俊教授には、多くのご教示をたまわり、貴重な資料も提供していただきました。

注

- 1) 本稿における「旅行記」とは、日本を起点とした、期間を限定しない往復旅行を題材としたノンフィクションと定義する。この定義によれば、たとえば留学体験記や海外駐在員の回想記なども、旅行記に含めて考えることができるが、移住者の回想記などは、たとえ日本語で著されたものでも含まれない。
- 2) 青山は、ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』（河出文庫）巻末解説のなかで、『オン・ザ・ロード』が出たときに大学生だった作家トマス・ピンチョンが、ケルアックの作品を形容していった「遠心性の誘惑」という言葉を紹介している（510頁）。『オン・ザ・ロード』は、語り手サル・パラダイスの移動の物語であると同時に、彼の目に映る、移動する人々への共感の物語でもある。移動することそのものがモチーフである『オン・ザ・ロード』は、遠心性の誘惑、すなわち「ここではないどこか」を求める若者の無意識の欲求に働きかける文学作品であった。
- 3) 沢木は、アメリカ映画『ミッドナイト・エクスプレス』に着想を得て、みずからの旅の物語のタイトルを『深夜特急』とした。映画のなかで、「ミッドナイト・エクスプレスに乗る」という言葉は、脱獄を意味する隠語として用いられている。沢木、2008年、243-250頁を参照。
- 4) こうした雑多な出版物を分析対象としていくにあたって、有益な視点を提供した書物をあげておきたい。前川健一の『異国憧憬』（2003a）は、戦前戦後の日本人旅行者をとりまく状況の変遷を、物理的条件の変化から示そうとする書物である。同じく前川健一の『旅行記でめぐる世界』（2003b）は、戦後日本における主要な旅行記を分類・整理し、時代状況の特殊性、および著者の属性から分析を加えている。山口誠の『ニッポンの海外旅行』（2010）は、主として、1970年代以降の海外旅行の大衆化期について、手配旅行やガイドブックのようなメディアを通じた社会的分析を加えている。また、旅の実行から旅行記の執筆過程という側面については、沢木耕太郎の『旅する力』（2011）が手がかりを提供してくれる。さらに、沢木のようなノンフィクション作家のスタイルや、その登場の背景については、武田徹『日本ノンフィクション史』（2017）がくわしい。
- 5) これについては、2017年4月末のLASA（ペルー・カトリック大学）における発表原稿をもとに執筆した論文（Nagano, 2018）を参照されたい。また、同年6月に日本ラテンアメリカ学会（東京大学）においても、同様の内容について発表をおこない、有益なコメントを得たことを記しておきたい。
- 6) ここでは、他者の眼差しを意識しながら旅することをそのように呼ぶ。
- 7) 探検の英語 expedition には、軍事的な「遠征」の意味もあり、遠征の次の段階には、征服、侵略、占領などがやってくる。日本が帝国主義的拡大を国是としていた時期に、

海外遠征である探検の学術的意義が強調されたことの意味を考えておく必要があるだろう。すなわち、探検は帝国主義的欲望と無縁ではないと同時に、その政治的意味合いに抵抗するには、学術的意義の強調は不可欠であった。もちろん、その際に見過ごされるのが、探検される側の言い分であることは言うまでもない。安村(2016)、4-6頁、20頁参照。

- 8) 梅棹忠夫も『モゴール族探検記』のなかで探検について次のように述べている。「たくさん荷物を持って遠い国からはるばるここまでやって来て、まだ目的地も、そこへ行く道すじもわからない。むちゃな話のようだが、探検とはそういうものである。よくわかっているのなら、探検なんかする必要はない。探検という仕事の、むつかしさもおもしろさも、もっぱらこの、『わからぬもの』を料理しなければならぬという点にある。」(梅棹、1956年、7頁)
- 9) 『朝日ジャーナル』1967年1月1日号。
- 10) 自由国民社『新問題を追う年鑑』1971年版。
- 11) 「植村直己論」『朝日新聞』1980年3月17日朝刊。
- 12) 同じ年に、フォトジャーナリストの石川文洋も、移民船に乗って日本を出国した。その時の気分を次のように語っている。「1960年6月15日、全学連が国会に突入、機動隊と衝突して東大生の樺美智子さんが死亡したとき、現場にいました。安保条約が調印されるのを、外務省公邸で見っていましたよ。仕事は面白かったんですが、だんだん日本という国に嫌気がさしてきて、世界一周の無銭旅行に出ようと思ったのです。26歳になったばかりの春でした」(石川、2017年、43頁)。海外旅行の自由化は、若者の日本脱出をうながしたようだ。
- 13) 長澤和俊は『世界探検史』(1969)の冒頭部分で、いくぶん興奮気味に、次のように書いている。「1969年7月21日は人類史上、画期的な日である。この日、はじめて人類は地球以外の天体—正確に言えば月世界—に足跡を印した。これはいわば人類の宇宙への進出であり、人類が地球から天体に乗り出したことを意味する」(長澤、2017年、9頁)。
- 14) 事実、こうした流れの中で東大探検部は解散を選んだ。藍野(2011)、409-418頁、および『京大探検部』(2006)、395-409頁、493-496頁を参照。
- 15) たとえば、1979年(昭和54年)1月5日の読売新聞は、こうした傾向を「探検野郎世界に行く」との見出しのもとに大きく取り上げ、「わずかの資金で海外放浪生活を送る日本人は珍しい存在ではなくなった。地球上が探検しつくされたと言われて久しいが、島国の日本からこれほどの大衆が外へ飛び出したケースは、過去まったくなかったのである。植村さんや堀江謙一さんたちの冒険とは違って、われわれの視界には飛び込んでこない価値ある体験が、その中に必ずある」と総括している。
- 16) 何をもち「探検部文化」と定義するかは難しいが、早稲田大学探検部の先輩と後輩にあたる高野秀行と角幡唯介の対談を読むと、探検部の反社会的なポーズなどについて、興味深い内容があるだけでなく、探検部がおこなっていた日々の実践についても具体的な手がかりが得られる。高野・角幡(2016)を参照。
- 17) もともとは早稲田大学探検部名義で、『幻の怪獣・ムベンベを追い』(PHP研究所、1989年)として出版された。

- 18) 沢木耕太郎が自らの表現スタイルを評していった言葉。それを武田徹がノンフィクションの方法論として敷衍して論じた。詳しくは武田 (2017)、第六章を参照されたい。

参考文献

- 藍野裕之『梅棹忠夫—未知への限りない情熱』山と溪谷社、2011年。
半藤一利『昭和史 戦後編 1945-1989』平凡社、2006年。
速水健朗『自分探しが止まらない』ソフトバンク新書、2008年。
本多勝一『冒険と日本人』朝日文庫、1986年。
石川文洋『旅する心のつくりかた—楽しきかな、わが冒険人生』インタビュー—岡野明子、SUNPOST、2017年。
開高健『オーパ!』集英社文庫、1981年。
川喜田二郎『発想法—創造性開発のために 改版』中公新書、2017年。
ケルアック、ジャック『オン・ザ・ロード』青山南訳、河出文庫、2010年。
近藤正高『タモリと戦後ニッポン』講談社現代新書、2015年。
小阪修平『思想としての全共闘世代』ちくま新書、2006年。
京大探検者の会編『京大探検部 (1956-2006)』新樹社、2006年。
『九州大学探検部 50年の軌跡』九州大学探検会、2015年。
前川健一『異国憧憬—戦後海外旅行外史』JTB、2003年a。
——『旅行記でめぐる世界』文春新書、2003年b。
室謙二『旅行のしかた—内側からタマゴを割る』晶文社、1975年。
Nagano, Taro. “Estudio preliminar para reconsiderar la mirada japonesa hacia América Latina: libros de viaje en japonés en la posguerra Showa, 1952-1989.” 『清泉女子大学紀要』第65号 (2018)、135-156頁。
長澤和俊『世界探検史』講談社学術文庫、2017年。
『飲んで食って寝て—地球放浪記』鷹書房、1975年。
小田実『何でも見てやろう』講談社文庫、1979年。
佐野真一『唐牛伝—敗者の戦後漂流』小学館、2016年。
沢木耕太郎『貧乏だけと贅沢』文春文庫、2012年。
——『旅する力—深夜特急ノート』新潮文庫、2011年。
——『深夜特急 1～6』新潮文庫、1994年。
鈴木紀夫『大放浪—小野田少尉発見の旅』朝日文庫、1995年。
高野秀行『幻獣ムベンベを追え』集英社文庫、2003年。
高野秀行・角幡唯介『地図のない場所で眠りたい』講談社文庫、2016年。
武田徹『日本ノンフィクション史—ルポルターージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』中公新書、2017年。
竹内洋『革新幻想の戦後史 上下』中公文庫、2015。
植村直己『青春を山にかけて』文春文庫、2008年。

戦後昭和における冒険旅行を考える——遠心性の誘惑にとらわれた若者たち——

梅棹忠夫『モゴール族探検記』岩波新書、1956年。

安村直己『世界史リブレット048 コルテスとピサロー—遍歴と定住のはざままで生きた征服者』山川出版社、2016年。

山口誠『ニッポンの海外旅行—若者と観光メディアの50年史』ちくま新書、2010年。

吉見俊哉『ポスト戦後社会』岩波新書、2009年。

——『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』岩波新書、2007年。

湯川豊『植村直己・夢の軌跡』文春文庫、2017年。

その他

朝日新聞データベース（聞蔵Ⅱビジュアル）

読売新聞データベース（ヨミダス歴史館）

毎日新聞データベース（毎索）